

食から見た都市

—地域と歴史を縦断して—

2010年7月29日(木) 13:30～18:30



場所：東京大学生産技術研究所 As棟 303,304号教室
入場無料、定員50名

● プログラム

13:30 開催挨拶

村松伸 (総合地球環境研究所教授・東京大学生産技術研究所教授 (兼任))

13:40～17:00 講演

①『16世紀後半におけるイスタンブールの食糧事情』

澤井一彰 (日本学術振興会・特別研究員)

②『都市の食と中国ムスリム 一回族の「清真」その民族・宗教・地域の交渉から』

砂井紫里 (早稲田大学イスラーム地域研究機構助教)

③『ジョバジョバ (幸せな独り者) —インドネシア都市部におけるキャリア女性の食行動とジェンダー規範の変容—』

阿良田麻里子 (国立民族学博物館外来研究員)

17:00～18:30 討議

コメンテーター 山下裕子 (一橋大学商学部准教授)

司会 深見奈緒子 (早稲田大学イスラーム地域研究機構准教授)

● 会場案内



* 小田急線 東北沢駅より徒歩7分

* 小田急線 / 東京メトロ千代田線

代々木上原駅より徒歩12分

* 井の頭線

駒場東大前駅より徒歩10分 / 池ノ上駅より徒歩10分

開催趣旨

私たちは、メガシティのこれからを見定めるために、地球上に存在した都市、あるいは今、まさに地球にある都市を、さまざまな角度から見て、その工夫や問題点を学ぶ研究会を開いています。今回は、食をテーマにします。「食べることは人間の存在条件の第一とも言える行為で、都市を考えると重要な切り口になるのではないのでしょうか。

16世紀オスマン帝国の首都イスタンブールの食糧供給事情、中国におけるマイノリティでありしかも食の禁忌を有するムスリム（イスラーム教徒）の対応、そして現代のメガシティたるジャカルタの食の変容のご発表をお願いいたしました。その後、ジャカルタの漁業資源とマーケットの研究を進めている山下裕子さんからコメントを戴き、お越しいただいた方全員が参加する形で、都市と食の関わりを、地域と歴史を縦断する形で討論を進めていきたいと思っております。

食は、アイデンティティや都市的経験、グローバリゼーション、変容とのかかわりで考えられる側面と、もうひとつには、食の安全、栄養、グローバルフードシステムなどから考えられる側面があると言われます。東京では世界の料理が食べられるようになってきています。今後、食生活とともに都市はどのように変容していくのでしょうか。みなさまのご参加をお待ちしております。

「16世紀後半におけるイスタンブールの食糧事情」

澤井一彰（日本学術振興会・特別研究員）

1453年にコンスタンティノポリスが征服されて以降、イスタンブールはオスマン朝の都として、地中海世界における政治的、経済的あるいは文化的中心となった。中世以降、減少の一途をたどっていたその人口も、オスマン朝の移住政策によって増加に転じ、まもなくイスタンブールは地中海世界最大の都市に成長するにいたる。しかし、16世紀も半ばにさしかかると、止まることなくイスタンブールへの流入をつづる人口は、次第に都市の食糧事情を圧迫しはじめる。こうしてオスマン朝政府は、それまでとは一転して流入人口を抑制し、同時に帝国各地からイスタンブールへ食糧供給を円滑に実施するための政策を講じることになる。本報告では、『枢機勅令簿』と呼ばれるオスマン史料を用いて、イスタンブールが巨大都市となった16世紀後半における食糧事情をあきらかにするとともに、政権の根幹を揺るがしかねない飢饉や食糧暴動の発生を未然に防ぐためにオスマン朝がとった諸政策について検討する。16世紀後半におけるイスタンブールの事例を通して、工業化以前の都市社会における食糧問題について考える契機としていただければ幸いです。

「都市の食と中国ムスリム 一回族の「清真」その民族・宗教・地域の交渉から」

砂井紫里

（早稲田大学イスラーム地域研究機構助教）

中国各地の料理店や軽食屋、屋台などにみられる「清真」の二字は、それがムスリムにとって安心な物、ハラール（合法）であることの標示であり、同時に、回族などのイスラーム信仰を持つ少数民族の表象のひとつでもある。またより限定して回族の料理・食品を指して用いられている。現代中国における清真料理の捉え方は、イスラーム料理、民族料理、地方料理、外国料理と多重化しており、誰が語るか、誰が食べるかによって異なる様相を呈している。一方で中国のWTO加盟、国際市場の拡大にともない清真食品の法整備が進み、清真の宗教的定義への重点の移行が強まる傾向がある。

そこで本報告では、中国ムスリムの清真料理の展開について、福建、西安、銀川の回族の人びとの日常生活における清真な食実践と料理書や食品管理条例による標準化との関係を検討し、都市の食における中国ムスリムの外食と食にまつわる「思い入れ」について考察したい。

ジョジョバ（幸せな独り者） —インドネシア都市部における キャリア女性の食行動とジェン ダー規範の変容—

阿良田麻里子

（国立民族学博物館外来研究員）

通貨危機やスハルト体制崩壊後の混乱から、インドネシア経済は10年足らずで立ち直った。都市部では大規模なショッピングセンターが相次いでオープンし、外食産業の発展も著しい。ここ数年は、2006年半ばに始まったテレビ番組「食の観光」の影響下、空前のグルメブームを迎えている。そんな中、都市部に住む中間層以上の職業女性の間では、ライフスタイルに大きな変化が見られる。30を超えて独身で、一人暮らしの女性も珍しくない。民族集団の枠を超えて共通するライフスタイルを持つ彼女達は、外食や中食を楽しみながら、友人達と緊密な関係を築いている。また、インドネシアでは従来、女性が一人で外食をするということは、規範を逸脱した異常な行為であった。しかし今や外食するおひとりさま女性の姿も人目をひくものではない。ジャカルタとバンドゥンを舞台に、「幸せな独り者（jobjoba）」を自認する女性たちの暮らしぶりを、その食行動を中心に描く。

コメンテーター 山下裕子（一橋大学商学部准教授）

問い合わせ

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山4 5 7 番地4

mail: kensuke@td6.so-net.ne.jp / kensuke@chikyu.ac.jp

tel.: 075-707-2340（直通） / fax: 075-707-2508

担当：林憲吾

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（村松プロジェクト）